

# 勝林寺

## 道解決聖道難証

## 唯明淨土可通入

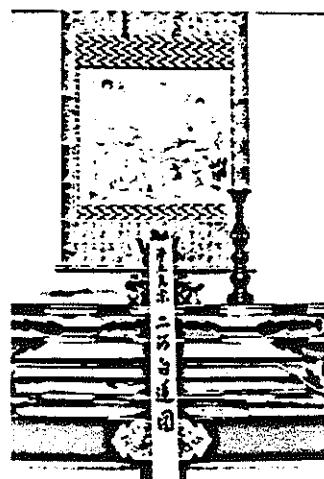
## 万善自力貶懲修

## 円満德号勸導禁

秋のお彼岸を過ぎ、ようやく暑さが遠のいていったように感じます。今年は暑さがダラダラ長かつたせいか、勝林寺境内の彼岸花は九月の終わりになつた今ようやく咲き出しました。彼岸会法要の法話冒頭は“夏が暑からうと寒からうと、毎年彼岸花はお彼岸になるとちゃんと咲いてくれますね”が定番でしたが、今年は咲き出さず、昨年は散つてしまつていきました。

勝林寺では毎年お彼岸には右余間(ご)本尊に向かって左の余間)に「浄土真宗二河白道図」という掛け軸を飾らせていただいています。お

彼岸限定の特別展示ですので、ぜひまたお参りの際には見てみてください。この「二河白道」の図を眺めていると、自分の人生の姿を、ドローンのカメラで高いところから眺められているような感じがします。“あちらといちら”あの世といいの世“彼岸と此岸”“浄土と穢土”男女”二つを分ける間には深くて暗い河があるのです。こちら側に立つ私はあちら側に何とか渡りたいと思うのですが、その大河は一方で関西空港連絡橋を破壊するほどの大波がたち、一方でアラブの油田のような猛火が立ち昇つていて、とても小さな船を出して渡れるようなものではないと考え、多くは川上を目指し陸路を歩き遡つて行くのです。といふん川上に歩いていけば、円山川も、生野の分水嶺まで歩いていけば小川となり、またいで渡れるというようなものです。聖道自力の仏道はこのよだな川の渡り方を教え



ます。しかし、迷い多く、欲深く、ノロマで力のない私たちには、到底そのような苦難の長旅はできないでしようと、中国の道締様は教えてくださつたのです。それではどうして渡つていらぬか。自分の力でエンヤコラと小さな船を出すのではなく、一人とぼとぼと遠い果てしない難行の道のりを上流に向かつて旅していくのです。横さまに河を超え渡りきる道を選ぶことが私たちの唯一の道であることを教えられたのです。横さまに河を橋渡しする白い道は、猛火と激流の恐怖にさらされた細い小さな白い道として描かれています。その道を行者はお釈迦様に背中を押され、阿弥陀様の光に照らされ、招かれて涼しげにわたりていく姿が描かれています。この阿弥陀様によつて用意された、私たちの力では渡ることのできない河を渡す道が“円満徳号”すなわち“南無阿弥陀仏”をただ専らに口に称える称名念佛の道なのです。第四祖の道締禪師はお正信偈の中で、私たちに専らお念佛を称えることを勧めてくださいました。

二河白道の譬えはこの道締禪師の教えを引き継ぐ次の第五祖善導大師のものです。いろいろなお寺に、いろいろな「二河白道図」があります。それぞれ特徴があるものなので、比べて見てください。

(文責 住職)

## ご案内

### 先代住職

百回忌(可生法師)並びに  
三回忌(哲俊法師)のご案内

期日 10月6日(日)  
午前10時より

\*どなたでもお参りいただけます。

\*代議員様、役員様には、お斎(食事)を用意させていただいております。欠席の場合は、寺まで事前にお知らせください。

### 敬老報恩講のご案内

今年も役員様方のご尽力で、敬老報恩講を開催いたします。今日までのご奉仕に感謝しつづ、精一杯のおもてなしでお待ちしております。

ぜひ、誘い合わせてご参加ください。

期日 10月19日(土)

午前11時より

### 内容

お勤め

### 法話

お食事・懇親演芸会

### その他

送迎バスを差し向けてます

ご希望の乗車場所があれば、気軽に寺へ

ご連絡ください。

敬老報恩講  
長寿寺 報恩講

二七日(日) 後藤富佐子宅 一周忌

(敬称略)

## 十月 勝林寺 予定

一日(火) 水島伊佐夫宅 七回忌

二日(水) 出石但東仏教会 総会

四日(金) 総代ブロック研修会(じばさん)

六日(日) 前住職 三回忌

前前々住職 百回忌

九日(水) 敬老報恩講 舞台稽古

平田 専福寺 報恩講

宮嶋千里 二五回忌

石田則昭宅 三回忌

一四日(月) 関森敏昭宅 七回忌

一六日(水) 敬老報恩講 舞台準備・稽古

高福寺 報恩講

斎藤貴明宅 忌明法要

稲葉保夫宅 三三回忌

みのりを聞く会

二六日(土) 長寿寺 報恩講

後藤富佐子宅 一周忌

勝林寺 0796-52-3083 緊急時 090-3708-5424



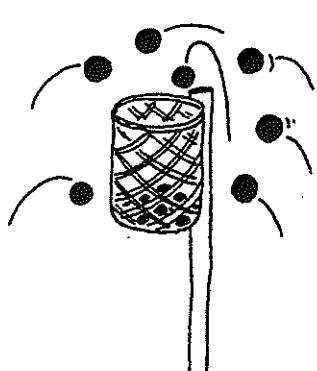
葬儀

九月五日

八鹿町上小田 齋藤昌子様 八九歳

九月二十五日

出石町丸中 立脇 晃様 七一歳



## 親鸞に学ぶ生き方

釈尊が、私たち仏教徒の社会的な生き方として教えたものに、「同事(どうじ)」ということがあります。それは相手と同じ立場に立つて、相手のために協力し、その利益をはかることをいいます。たとえば、母親が我が子にスプーンで何かを食べさせるとときに、「アーンをしなさい」といながら、自分もまた同じように口を開ける、というような動作をするなどをいうわけです。

親鸞の生き方にも、そのような「同事」ということが、うかがわれるところです。すなわち、その『唯信鈔文意』において、中国の元照の『阿弥陀經義疏』の、「屠沽(とご)の下類(げるし)」という文を引用、解釈するについて、「れうし、あき人さまさまのものは、みな石、かわら、つぶてのびとくなるわれらなり。」と書かれています。当時は獵師(屠)と商人(沽)は、社会のもとも底辺に屈するものとして、世の人々からは、石、瓦、つぶてのように、まったく価値のないものとして、さげすまれ、差別されていたわけです。しかしながら、親鸞は、そのような獵師と商人について、「われらなり」といつています。親鸞は、別に獵師をしたことでも、商人をしたこともありませんが、その人々を名指して、「われら」といわれるわけです。

ここには親鸞が、深い共感と連帯の思いを持つて、そういう被差別者たちに、「同事」していることが、よくうかがわれるところです。

今年(二〇一)の三月、東北地方を襲った大地震と津波、そしてまたそれによる人災としての東京電力の原発問題は、まことに悲惨すぎる状況を惹起しましたが、それに対して、私たち親鸞の教えを奉ずる真宗教団はどう対応したかに行動を起こしたでしょうか。真宗教団は、今年は親鸞聖人の七五〇回の御忌法要だという

ことや、そのような惨事については、あまり関心を示すこともなく、それぞれの本山において、その法要を賑やかに厳修しているところです。

いまなお九万人を超える人々が、身寄りもなされているにもかかわらずです。親鸞における「同事」という生き方はどこに行つたのか。本願寺教団は、どうして、その莫大な法要費を、被災者のために投げ出さないのか。それこそが、まことの遠忌法要になるわけでしょう。

かつてアジア太平洋戦争中に、鈴木大拙氏が「今日の本願寺のときものは祖聖の志を相去ること実に幾千万由旬である。本山の祖師堂には愚禿は居ない。一人の親鸞は、一もしそこにおわすとすれば一灯影裡で泣いてござるに相違ない。」『日本的靈性』

といって、痛烈に批判しましたが、そのことは今もなお、そのまま通用するのでしょうか。まことに悲しいかぎりです。

親鸞は私たち真宗者の生き方について、「信心のしるし」を生きよと教えられています。その「しるし」は証拠ということです。念佛を申し淨土を目指して生きるものとしての、確かな証拠を見せてほしいと言われるわけです。まことに厳しい教訓です。

今日即今における「信心のしるし」とは何を意味するのか。私たち真宗者はその一人ひとりが、自己責任として、心をひそめてその「信心のしるし」の内実を尋ねつつ、確かに自立して、たくましい行動をおこしてゆきたいものであります。

(信楽峻磨遺稿法語集より引用)



法語カレンダー一〇月

## 「信心」といふすなはち本願力回向の信心なり

信心なり

どすん

本堂の前の大きなイチョウの木。先日、その先から五メートルほどを切り落としていただきました。理由は、庭師さんから「これ以上大きくなると剪定できません」と言わ

れるのは、他力回向の教えです。阿弥陀仏が本願力をもつて、その功德のすべてをあらゆる衆生に振り分け与えられることを意味します。親鸞聖人の教えの中、最も大切な信心について、「本願力回向の信心」と表現されるように、信心は私たちが起こすものではなく、阿弥陀さまの本願力・はたらきによつて与えられるものであるといわれます。衆生一人ひとりが起こす信心であれば、その能力・力量によつて信心の内容に違いも生じ、また、それによって生まれていく淨土も当然異なつてしまします。しかし、いずれも阿弥陀如来のはたらきたよつてできあがつた信心であるために、その内容にまったくかわるところはありません。信心は自分で作り上げるものではなく、阿弥陀如来から賜つた他人力回向の信心であるということです。

では、阿弥陀如来より賜つた、与えられた信心とは、具体的にどういうことでしょうか。私は広島の出身です。初めてマツダスタジアムにプロ野球の観戦に行きました。野球の応援は、声援あり、拍手あり、ウェーブありの、さまざまな行動がありますが、その元は広島カープというチームの活躍があるからにはなりません。応援する姿を見れば自ら力を振り絞つているのですが、カープというチーム、そしてその活躍がなければ、球場に足を運ぶことも、一丸と成つて応援することもあり得ません。本願力回向といわれる信心も、阿弥陀さまのあらゆるもの

とが否定されてしまう・人生にも多かれ少なかれありますよね。そんな時、人はどうすれば次の一歩を踏み出せるのが。それは、また、木の姿が教えてくれます。木は、切られてもまたそこから新たな芽を出し、葉を出し、枝を伸ばしていくます。(多分うちのイチョウの木も)それは、目に見えない大地にしっかりと根を張つて、張つた生き方ができればいいですね。人が根を張れる大地、それは「仏地」(仏さまの「本願」)であると教えていただきます。(文責 坊守)